

もの作りと学び

内 村 由 紀

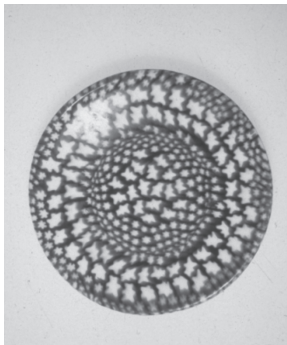
はじめに

1960年代に生まれた私の子供の頃、たいていの一般的な家庭には簡単な大工道具があって、家屋や家具の小さな補修程度であれば父親が行ない、母親は子供の服を縫い、子供たちはさほど役には立ちそうにない手伝いをしながら、親の動かす手元を眺めているという光景があった。当時は今ほどに安価にものが溢れてはいない社会だったので仕方なくやっていた大人もいたであろうが、楽しんで行なっていた大人も少なくなかった。子供たちは普通の暮らしの中で行なわれている大人たちのもの作りから、発想力、想像力、実行力、忍耐力、判断力と教養をも身に付け、感じる心をも養って成長した。

その環境が大きく変わり、教育の場でのもの作りを通して人を育てる意義は大きいと考える。自らの経験を通して、人間性を構築する重要な時期に如何なる態度と方法で学生に臨むべきかを考えたい。

1. 人の手によるもの作り

私がガラス工芸と出会ったのは1981年。ガラス工芸の専門的な教育機関として日本で初めて開設された東京ガラス工芸研究所の最初の学生として入学したことがガラス工芸との出会いであった。ガラス美術史が専門の美術史家が設立した同研究所では、古代ガラスの復元作業の過程から素材を学び、作品制作に活かすというカリキュラムで教育を行っていた。ところが、この古代ガラス技法による作品が完成までの過程で破損してしまい、うまく出来上



がらないのである。電気炉内で焼成して成形する鑄造技法とミルフィオリ技法が、焼成後に鑄込み型を割り出し、ガラスを手にししてみると割れていることが再三であった。

この星模様がある小さな平皿は、1982年に私が初めて作ったミルフィオリ技法による直径15cm程度の皿である。このガラスにはヒビはない。当時、大阪府富田林市在住でトンボ玉技法では第一人者であった飯降喜三郎先生（1920-1990）から、ガラスが割れないための知識を授けていただいた。研磨の方法は江戸切

子の大家、小林英夫先生（1923-2011）から工夫のお知恵を頂いた。飯降、小林の両人は異なるガラス技法のつくり手であるが、ガラスという素材を長きに渡り触ってこられ、またその分野で長い歳月を受け継いで来た伝統の技を身に付けておられたので、全く異なる技法においても、ご自身が知るガラスの特質と知識から解決へと導いてくれたのである。工芸作品の完成には素材の組成や性質を詳しく知ることが第一歩であること。問題がどこに起因しているかを如何にして探るか。問題解決に対する工夫の仕方などを実践して示してくれた結果となった。それまで学校の教室の席に座り、教科書と黒板から写し取るという学び方で育った私には、それは感動的とも言える学び方であった。

【現場での実践例 1】

1 年次：ものの作りが楽しいと思える会話を心がけている。

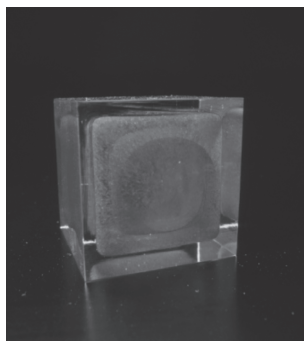
本人の良いところを見出し、自信を持たせるための声掛けの実行。

2 年次：個性を伸ばす指導と自身の考えを発表する経験。

制作実習においては道具の選び方と制作における工夫の仕方を指導。

3 年次：自身の考えの構築。文章を書くことと発表することを全課題で行なっている。

4 年次：適時の助言指導で大きく成長してくれる。



この手のひらサイズほどのガラスキューブは、熔解炉で溶かしたガラスを用いて制作したものである。まず初めに 1250℃ の熔解炉で熔けている無色透明のガラスの中に色の層をつけた球の塊を作る。それを改めて四角い鋳型に入れて 800℃ に温度を上げた電気炉内で加熱、変形させてみた実験である。丸かった色の層が鋳型の形状に沿って四角く変形したことが分かる。最初に球体に作ったものを四角い型の中で溶かしたので、四角く変形して当然であるが、それを実際に行なうことがもの作りにはとても重要である。当然であると推察できることでも、実践的にやってみると、疑問を持たずに結論を出してしまうことに誤りがあることなどを気付かせてくれる時がある。実際にやってみるものの重要性を知ったのはもの作りを始めてからだ。私は、この実験でガラスの内面にモノが映り込むことを知った。ガラスにはものを反射する性質があることは誰もが知るところであるが、その内側にも映り込む現象が起きることを知ったのはこの時が初めてで、ガラスの特質の一つを知るきっかけとなった。

このキューブは、頭で考えたことを実際にやってみるものの重要性と、その結果から得られた材料の特質について伝えるために、本学で私が担当する『ガラス工芸論』を受講した学生たちに、実際に手にしてもらっている。制作実習の授業においては、制作を始めた作品は

たとえ気に入らない結果が出ようとも、最後まで仕上げることを指導している。諦めない気持ちを養うとともに、最後までやり遂げることから得られる改善点から成功へのヒントを導き出し、次作へ繋げることを学んで欲しいと考えている。

【現場での実践例 2】

3 年次課題「self-portrait」

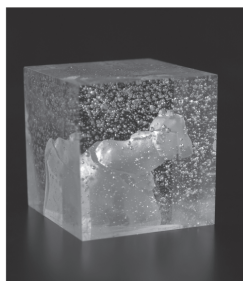
現在の自分自身を 10cm キューブの中で表現する。

キルンキャスト（電気炉内で行うガラス鑄造技法）と鏡面仕上げ研磨の履修。

左が完成したガラス作品で、右は耐熱石膏で制作した中子の鑄型。

現在の自分に向き合い 10cm 立法の空間に自己を表現する。

鑄型制作と研磨仕上げの工夫と根気のいる作業の実践。



2. もの作りは人を育てる。

ガラスは熱を加えると熔ける。熔解温度に達しても粘度が高いため、吹いて膨らますことが可能である。私は地球上で最初にガラスを吹いてみようと思いついた人は最高に頭の良い人だと思っている。ローマ時代には吹きガラスは行なわれていたので、その人は紀元前にいた。そ



れまでは、窯の中で型を用いてガラスを加熱する成形方法や、土などで作った芯材に炎で溶かしたガラスを巻き付けて容器を作るコアガラス技法というような、非常に手間と時間を要することを行ってきたのであるが、紀元前1世紀ごろの古代シリアで溶けたガラスを金属製のパイプに巻き付けてガラスを吹いて成形する方法が考案されてからは、一気に大量のガラス製品を生産することが可能になった（注1）。素材の特性を知り、最適な成形方法を考え、新たな可能性を生み出して、人の暮らしは向上してきたのである。人は太古の昔から暮らしの中で学習し、考え、工夫をし、社会を向上させるとともに、一人一人の人間を成長させたと思う時、ものの作りは人を育ててきたと言える。

ガラスという素材は吹いて成形ができるだけでなく、窯の中で徐々に加熱してゆけば割れることなく形を変えることが出来る素材である。一般的にガラスは熱に弱いと思われているが、実は熱に弱いのではなく、むしろ熱に強いからこそ燃えて消失することなく、溶けた状態で存在し、伸ばしたり膨らましたりすることが可能となる。ガラスは熱に弱いではなく、温度の差に弱いだけであるから、ゆっくりとガラスに寄り添うように加熱してゆけば、曲げたり（＝スランピング技法）、溶かし着けたり（＝フュージング技法）、鋳込む（＝キャストイング技法）ことも可能なのである。そうした試みの過程で、暮らしの中で使えるものを試作したのがこれらの机上のガラスである。

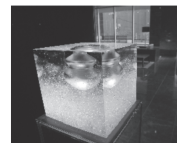
私は2000年頃からマンションや病院、ホテル、オフィスビルなどにガラス装飾を施工したり、ガラスの立体作品を設置させていただいている。ガラスは割れる素材であるが故に、公共の場での使用を躊躇されてきた経緯があるが、ガラス特有の美しさを生かして、人が集う公共の場でガラスの美しさを生かした表現を行ないたいとの試みから、これまでに道ノ尾病院（長崎）、丸の内ホテル、虎ノ門イーストビルディング、東急STUDIO（市ヶ谷）、月島キャピタルゲートプレイス、広尾フォレストガーデン等々にガラス造形作品を納めてきた。施主や設計会社、あるいは内装コーディネイター等の提案と協力があるからこそ実現できるのであるが、建築の現場では今日、工芸家の手によるガラスの採用が増えている。社会がガラスの良さを求めるようになった証であるとともに、作家の想いのこもったガラスの表現に期待されていることを感じる。つくり手たちのものの作りに対する想いがある限り、ガラスの弱点である“割れる”ことに対する対策を施して安全性を確保し、法律を遵守した上でこれからもガラスの採用が増えることと思う。



広尾ガーデンプレイス
（鋳造ガラスと鋳造アルミ / 2013年）



月島キャピタルゲートプレイス
（鋳造ガラス / 2016年）



【現場での実践例 3】

指導においては、学生の望む試みに対して積極的な態度での対応を心がけている。安全性に配慮の上、結果のわかっている場合においてもそれを伝えず、まずはやって見ることの体験である。その中から、自身で方法論を学び、成功へと導き、自身の能力が高められてゆくのである。身を以て得られた能力は生涯を通じて人生の様々な場面で発揮することができる能力となる。

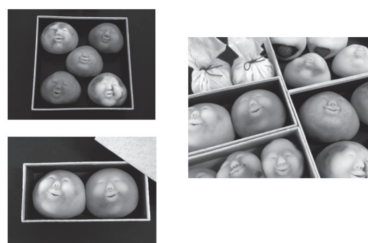
4 年次課題「自己表現の探求」

自己を深く捉えて個性重視の発想を促し、造形に繋げてゆく指導。

技術的挑戦に対する後押しと助言指導。



【制作意図】 福をおくる
今まで私を支えてくれた全ての人に心から感謝を込めて特別な贈り物をおくりたい。
見る人がふっと笑ってしまうような表情を、ほっとできるような柔らかくあたたかい
質感で表現しています。



3. ものづくりの人生

1982 年。私が学んだ東京ガラス工芸研究所は米国でスタジオガラス運動を起こした初期のメンバーの一人であるハーヴェイ・リトルトン氏 (Harvey K. Littleton/1922-2013) の来訪を受けた。リトルトン氏とその仲間たちが初めて彼らの設計による個人用の小さな熔解炉でガラスを溶かした年が 1962 年と言われているので (注 2)、それから 20 年後の出来事である。当時の研究所はかつてのパウハウスの教育を取り入れており、技術の習得は専門分野の職人さんたちから学び、デザインと造形的指導



を彫刻家やデザイナーから学んでいた。芸術家であつたりトルトン氏はその時に初めて出会った日本の職人さんと息を合わせて生き生きとしたデモンストレーションを披露し、研究所の特製 T シャツを着て、ガラスの原料屋さんの前掛けを腰にしめ、日本での吹きガラスを楽しんでおられたのが非常に印象的であった。この写真はその時の様子であるが、ここに濱田庄司氏（1894-1978）のご子息と、富本憲吉氏（1886-1963）のお孫さんが写っている。濱田庄司氏の四男として生まれた濱田能生先生（1944-2011）は日本の美術大学で彫刻を学ばれたのちに英国に渡ってガラスアートを学び、帰国後に栃木県鹿沼市に吹きガラスの個人工房を建てられて、既に作家として活躍されていた。その当時は東京ガラス工芸研究所でも指導をされており、私がタンブラー作りの練習をしていたときには『器は底を平らに。』と、木ごと（ガラスを平らにする木製の道具）の当て方を注意していただいたことを鮮明に覚えている。以来、この言葉は器を作るときの私の戒めになっている。

富本憲吉氏のお孫さんは私の 1 年あとに入学して来た後輩である。彼も私と同じく、何か面白いことはないかと、やりたいことを探している真っ最中のように見えた。あるとき、ご家族とともに暮らす都内の自宅にお邪魔したことがあった。明るくて広々としたリビングの白い壁の一面に作り付けられた棚にたくさんの富本憲吉氏の手による器があった。それはまるでつくり手にこちらが見られているように感じられ、戸惑いを覚えた。器に込められた作り手の魂とでもいうべきものが伝わったように思える。奇しくも重要無形文化財保持者の陶芸家の家に生まれた二人であるが、いざ自身の人生を歩もうとするときに、ガラスという素材は新鮮で人生を面白くしてくれるものに感じられたのかも知れない。

【現場での実践例 4】

本学のガラス工芸コースで学ぶ学生たちにもグローバルな観点からの広い視野で自身の人生を歩んでもらいたいと考え、海外の作家の来日を捉えて積極的に外国人の特別授業を取り入れている。また、国際部の協力を得て、アメリカクラフトセミナーとしてアメリカの大学での共同授業を行ってきた。ナイフとフォークの文化で育った学生と箸の文化で育った学生が同じ課題にのぞみ、合同で制作、発表を行ない、異なるものの見方と考え方に会う経験を通して、自身の考えを構築する貴重な経験となっている。初めて海外に出るという学生もいて、引率者の言葉一つで学生の捉え方がいかようにも変わることの危険性に注意を払いつつ、学生自身が直に体感することを最も大切にしている。

アメリカでの合同授業と本学での海外作家による特別授業

2010 年 第 1 回アメリカクラフトセミナー（ニューヨーク／ロチェスター工科大学）

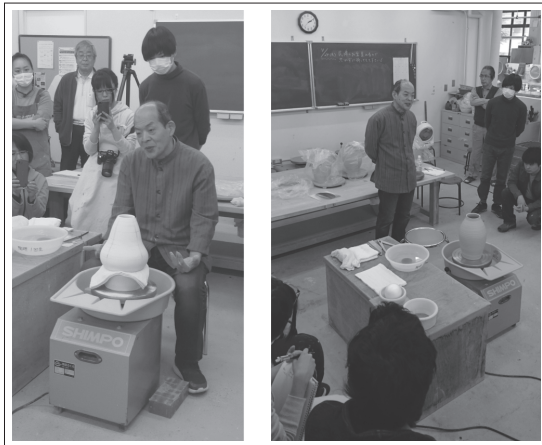
Scott Benefield（米国／吹きガラス）、Andrew Spencer（スコットランド／吹きガラス）

Bandhu Scott Dunham（米国／フレームワーク）、Robin Cass（米国／吹きガラス）

- 2011年 Chadd Lacy (米国／吹きガラス)、Sean Salstrom (米国／吹きガラス)
2013年 第2回アメリカクラフトセミナー (カリフォルニア美術大学)
2014年 Boyd Sugiki (米国／吹きガラス)、Lisa Zerkowitz (米国／キルンワーク)
Jay Musler (米国／フレイムワーク)、Dominic Fonde (英国／エングレイビング)
2017年 第3回アメリカクラフトセミナー (カリフォルニア州立大学フルトン校)
2018年 Mickael Rogers (米国／ガラス造形家)、Ingna Andere (ラトビア／パフォーマー)
中田一志 (フィンランド在住／ガラス造形家)、Steven Ciezki (米国／吹きガラス)
2019年 Peter Bremers (オランダ／キルンワーカー)、Jay Musler (米国／フレイムワーカー)

4. もの作りは人の心を豊かにする

2017年の春、大阪芸術大学の陶芸コースに重要無形文化財保持者の前田昭博先生が特別講義にいられた。前田先生は本学の卒業生である。先生は代々続く窯元の生まれでもなく、



2017年 前田昭博先生の特別授業

育った土地が焼き物の産地でもなく、
本学の工芸学科に入学されてから陶芸
を始められた作家である。在学中に学
んだことやこれまでの経験談を学生た
ちに静かな口調で語りかけながら、い
つもお自身が使われている道具を使っ
て制作して見せて下さり、更には学生
にも実際に作業をさせて下さった。お
よそ4時間の特別授業の中で「自分の想
いを形に。」或いは、「想いを込めて手を
動かす。」というように、幾度も「想い」
という言葉が口にされ、いかに作家の

想いが大切であるかを改めて考えさせられた。そして、もう一つ大切なことは自分の想いと
は何かを認識することであろう。私はもの作りを始める以前の頃を思い返すと、人の手で作
られたものながら、それを物体として眺めていたように思う。現在はそのものが持つ造形的
な美しさや用の美とともに、つくり手の工夫や苦勞までもが伝わってきて、そこまでしても
なお表現したかった作者の想いを感じることができる。また、耳に入ってくるもの、目にす
るもの、体験したことや肌で感じたことなど、日々の暮らしから感じたことについて考える
ようにもなった。そのことがまた自身の想いと考えを膨らませ、もの作りを通して感じる心
を育ててもらったと実感している。人が行なうあらゆるもの作りは人の心を育て、人の心を
豊かにする由縁であろう。

【現場での実践例 5】



2人1組の吹きガラス実習



チームワークの吹きガラス実習

吹きガラス技法はその方法から制作者がアシスタントを必要とする技法であり、制作者とアシスタントはお互いに交代し合ってそれぞれの制作を行なう。制作者が何を望んでいるのか、どうして欲しいのかを察知し、相手の動作に合わせてアシスタントは作業を進めて行かなければ良い作品を作ることは難しく、技術力と同等に相手への配慮と思いやりが求められる。私の1年次の授業においては、相手を選ばせず、ジャンケンやくじ引きで組み合わせを行なっている。肌の合う者、合わない者があって当然ではあるものの、制作する際にはそれを越えて同じ作り手として制作に向き合う努力をさせるためである。1年次でのこの経験はその後の人間関係の構築にも良好的な影響を与えていると感じている。

まとめ

人類は長い歩みの中で生き延びるために道具を作り、そして、もの作りを行なって今日まで繋がってきた。現在を生きる私たちも未来に知恵と技術を伝える時、大切にしたいのは人の心である。人が社会をつくり、人の心が社会の根源であるから、社会の発展とともに世界が急速に小さくなり、驚異的な技術革新が起きている今、教育に携わるつくり手は、もの作りを通して人の心の大切さを伝えてゆくことが使命ではないだろうか。もの作りと心の表現を源とする芸術は、社会の中で人を育てる教育に大きく貢献できると考える。

(注1) 参考：「ガラスの百科事典」朝倉書店 作花 済夫 編 P18～P19

「ガラスの考古学」同成社 谷一 尚 著 P89～P90

「世界ガラス工芸史」美術出版社 中山 公男 著 P32～P33

(注2) 参考：「ガラスの百科事典」朝倉書店 作花 済夫 編 P128～P129

「世界ガラス工芸史」美術出版社 中山 公男 著 P154